様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２７０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２４６８

研究課題名（和文）ジャポニスム以後の浮世絵評価の比較研究―永井荷風と小島烏水を中心に

研究課題名（英文）A comparative study of ukiyo-e appreciation after japonisme

研究代表者
南　明日香（MINAMI, Asuka）

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：２０３２９２１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：ジャポニスムの主翼を担った浮世絵であるが、日本では長きにわたって貶められてきた。が、欧米で美術史学に基づく研究が深まり、日本でもその成果が伝わった。
本研究ではその経緯を明らかにするために、三つの角度からアプローチした。まず欧米での評価について、日本美術文献の収集をしていたO・ミュンスターベルクの蔵書を探し出し目録を作成し、浮世絵研究の集大成といえるパリ装飾芸術美術館での連続展覧会の豪華図録を分析。さらに日本の西洋美術史研究の分野で、雑誌論文や著書でのジャポニスムの影響の扱われ方を調査した。その上で国外の浮世絵研究を紹介し、その作品記述を自身の文章に応用した永井荷風や小島烏水等の文章を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
浮世絵版画が19世紀後半から欧米でコレクションされ、その研究が日本より先に行われていたこと、日本でもそれを紹介した人物がいたことは知られていた。が、作品相互の影響関係ではなく、文献による受容や影響関係については、調査が進められていなかった。
本研究では欧米や日本での著書や雑誌の紹介にとどまらず、それらの具体的な記述・評価の分析を行うことで、欧米での浮世絵版画の歴史や、画題の意味、絵師の作風や流派などがどのように理解されたかを明らかにした。現今の浮世絵ブームことに「里帰りコレクション」への一般での関心に即していたことで、講演会の機会も得られ、またジャポニスム研究においても貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：Ukiyo-e prints, which played the main role in the Japonisme boom in Europe and the United States, have long been looked down on in Japan. However, research based on Western art history has strengthened in their countries and, in Japan, some connoisseurs have also been aware of these positive results.
The present project is aimed at clarifying this movement from three angles. Firstly, to discover its assessment in Europe and the United States, we searched the library of O. Munsterberg, who had collected documentation on Japanese art. We also analyzed the catalogues of the six-year series of exhibitions at the Musee des Arts Decoratifs in Paris, considered the culmination of Ukiyo-e research. In the field of Western art history research in Japan, we also examined the effects of journals and books on the subject of Japonisme. We then analyzed the texts of NAGAI Kafu and KOJIMA Usui, etc., who introduced Ukiyo-e studies abroad, and applied this methodology to their own writings.

研究分野：文化交流史・比較文化

キーワード：永井荷風　ジャポニスム　浮世絵　ミュンスターベルク　小島烏水　パリ装飾芸術美術館　審美書院　桑原羊次郎

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 2014 年から 15 年にかけて東京、京都、名古屋で開催された「ボストン美術館華麗なるジャポニスム展　印象派を魅了した日本の美」展は、美術雑誌でのジャポニスム特集（『芸術新潮』他）も企画されるなど、大きな反響を呼んだ。従来の造形作品でのモチーフの影響関係のみならず、コレクションにかかわった人物や評価研究にも注目が集まり始めた。申請者も「ジャポニスム（日本趣味）からジャポノロジー（日本学）へ－日本美術評価をめぐる切磋琢磨の時代」（2014 年 9 月、10 月相模女子大学主催市民講座）、「1910 年代前半の日本における西洋の浮世絵研究の受容」（2016 年 10 月ジャポニスム学会第 6 回畠山公開シンポジウム）、「初期浮世絵研究の言説をめぐって」（2016 年 11 月日本比較文学会東京支部 11 月例会）で、言説レベルでの浮世絵の研究の端緒を発表し、成果を得た。さらに日本国内での浮世絵版画への蔑視と再評価については、申請者はすでに論文「「日本趣味」か「江戸趣味」か ： 日本近代文学とジャポニスム 」で言及しており、これらを掘り下げて新たな論文とするべく、本課題に着手するに至った。

(2) 欧米のジャポニスム人脈については、申請者は拙著『国境を越えた日本美術史　ジャポニスムからジャポノロジーへの交流誌 1880-1920』でまとめており、永井荷風についても、すでに単著 2 冊を上梓しており、彼の『江戸芸術論』についての重要性は熟知していた。小島烏水については、横浜美術館が企画･監修をして『小島烏水版画コレクション　山と文学、そして美術』をまとめており、基礎資料のリストはできていたが、その著書についての具体的な分析は未だしであった。

2. 研究の目的

(1) 江戸時代に発達した浮世絵版画は、明治期以後、西洋美術史の研究方法が導入されてからも大衆の娯楽品もしくは印刷物の一部とみなされて、美術研究の対象とならなかった。それを改めて評価し、1915 年頃からの浮世絵再評価に大きな影響を及ぼしたのが、永井荷風（1879-1959）と小島烏水（1873-1948）という二人の文学者であった。彼らは 19 世紀後半のジャポニスム期以来欧米で出版された多数の浮世絵研究に学び、今日にもつながる浮世絵評価の基準を作った。しかしそれぞれの単行本にまとめる年代のずれなどにより、日本文学研究者にもジャポニスム研究者にも知られていないので改めて論文等により証明する。

(2) 本研究では各人が参考にした欧米の文献を調査し、受容した研究方法や鑑賞の視点や表現（美術史での「作品記述」）を分析したうえで、いかに発展させ後世に影響を与えたかを実証する。これによって同時期のいわゆる「江戸趣味」とは一線を画した、文学者の美術批評の意義を明らかにする。また日本では受け継がれず海外でのみ重要とされた浮世絵版画への着眼点を詳らかにして、日本側と欧米側の社会的･文化的背景を考察する。

3. 研究の方法

(1) 当初必要な資料の調査はイギリスとフランスと日本で行った。そののちパンデミックのために北米での調査は断念したが、多くの書籍や売り立てカタログがフランス国立図書館（BnF）のサイトなどインターネットで閲覧できるようになり、それらを用いた。

(2) 国外では、ロンドンの大英博物館と国立美術史図書館で、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての英国での浮世絵研究の状況を調査した。さらにパリの国立ギメ東洋美術館図書館で、フランスでの同時期の状況を、コレクション売り立てカタログから確認した。またフランス装飾美術連合のアーカイヴ（Archives des Arts décoratifs）で、1909 年から 1914 年にかけて毎年開催された大規模浮世絵展の際に刊行された長文解説付き大型図版と、これらに関する英米独仏の資料を探索し解読した。さらに会期間に日本人の桑原羊次郎や審美書院の参入もあり、それに関する資料の調査、および彼らが関係した 1910 年開催の日英博覧会での浮世絵版画の扱いなども、調べることになった。

(3) 国内では、早稲田大学演劇博物館で大正期の浮世絵に関する専門雑誌が多数閲覧できたので、そこから当時の浮世絵評価のありかたを知ることができた。また同大学中央図書館と国際交流基金ライブラリーには、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての英語の浮世絵関係文献、および日本人が利用した英語に翻訳された独仏の文献が閲覧できたのでそれらを利用した。また当時の個々の作品の情報（作者、画題、技術等）には、今日の研究からは誤りとされるものも少なからずあるので、言及されている作品について、できるかぎり現在の資料（北斎などの絵師の展覧会図録や研究書、浮世絵全集など）を用いて、正誤を確認した。入手できないものについては、東京芸術大学附属図書館などを利用した。

(4) 永井荷風については、『すみだ川』『日和下駄』『江戸芸術論』と浮世絵版画作品との関係を分析した。小島烏水については、『浮世絵と風景画』で言及されている外国文献からの引用箇所を見つける作業を行った。それぞれの文献については上記での機関の所蔵資料も利用し、また全集と初版本、初出誌を用いた。

4. 研究成果

(1) 2017 年から 18 年にかけて欧米での浮世絵研究の状況を調べるために、1909 年から 6 年間、毎年 1-2 月にパリの装飾芸術美術館で開催された、大規模な浮世絵版画展の調査をした。師宣、写楽、歌麿、北斎のような人気浮世絵師から知名度の低い絵師まで約 130 作者の作品約 2300 点と関連の書籍を 6 回に分け展示するという類のないシリーズ展であり、日本美術蒐集家 66 名のコレクションが出品され、ルーヴル美術館とパリ装飾芸術美術館の所蔵品版画も一部展示された。大判図録 6 点とアーカイヴに残されていた同展覧会関係の資料(書簡、書類、プログラム等)を解読することで、当時の浮世絵研究の水準、現在のいわゆる「里帰り展覧会」では伝わらない、浮世絵版画そのものの実態がわかり、成果はまず明治美術学会の例会(2018 年 4 月)で発表した。またエディション・シナプスから完全復刻版が出版されるはこびとなった。申請者はその『別冊解説』を執筆して、展覧会開催までの経緯、展覧会の評判や美術館での扱われ方、図録の内容、図録の購入者に加えて、フランスの美術史研究でいうところの「好みの歴史(histoire du goût)」にかかわる各国での絵師や主題の違いなどを明らかにした。さらにそれに対する日本側の反応として、美術出版社の審美書院と日英博覧会の浮世絵と刀装具の展示の責任者であった桑原羊次郎が、それぞれ複製画と肉筆画のコレクションを同美術館で展示するに至った経緯も探索して、美術館側との往復書簡や外交文書の拙訳も含む論文「パリ装飾芸術美術館における審美書院展と桑原羊次郎コレクション展(一九一一年)」を執筆した。これによりフランス語を理解しなくとも、また手書きの書簡が読めなくとも、20 世紀初頭の浮世絵版画受容を知りうる資料を供することができた。その後依頼により、かながわ大学生涯学習推進協議会主催で「＜見せたい＞日本美術とは ～パリ装飾芸術美術館連続展覧会を中心に」(2021 年 7 月)を講演し普及に努めた。

(2) 一方で、申請者はかねてからドイツの東洋美術研究家オスカー・ミュンスターベルクの旧蔵書の調査をしていた。およそ二千点の単行本、雑誌、論文抜き刷りは第一次世界大戦までの欧米での日本美術研究の様相を示すものであり、その中で浮世絵研究がどのような位置を示すかが客観的相対的に分かるものになっていた。ただ膨大な量と、複数の言語での資料、かつ所蔵先が不明であったりするものもあり、まとめるには至らなかった。が、時宜を得て改めてそれぞれの内容の簡単な説明も含む目録を完成し、所属機関の紀要にミュンスターベルクの業績も含めて長文の論文として発表することがかなった。

(3) 日本国内での浮世絵版画への蔑視と再評価については、2021 年 2 月にジャポニスム学会 40 周年記念フォーラムで「西洋近代美術史学におけるジャポニスムの位置」:「日本趣味」から「ジャポニスム」のタイトルで発表し、白樺派や西洋美術史家らのむしろ欧米の美術家たちへの浮世絵の影響を無視する動き、永井荷風と小島烏水の先見性、荷風の『江戸芸術論』(1920 年)が 1930 年代になって柳亮などに活用された点、「日本主義」との関連などを明らかにした。これは参照資料を増やして論文化し、2022 年にジャポニスム学会編『ジャポニスムを考える 日本文化表象をめぐる他者と自己』に収録された。同著は英語版を作成中であることを付け加えておく。

(4) 小島烏水については、口頭発表に資料を加えて論文《La Redécouverte de l'Ukiyo-e au cours des années 1910》で、その歌川広重研究の意義や作品記述の特色について論じた。そのうえで典拠となっている外国文献の出典の調査を行ったが、烏水による誤記、二重引用による誤解などが散見しており、これらをどのように論文化できるか検討中である。一方で作品記述に関してジョン・ラスキンの影響が認められたので、掘り下げていく予定である。

(5) 荷風研究については、まず全集に収録されていなかった荷風執筆の「仏國文豪の浮世絵研究」を美術雑誌『研精美術』で発見した。これを浄写し、荷風が同論を同雑誌に執筆した経緯について調査して、『相模国文 46 号』に発表した。これにより、荷風が E・ド・ゴンクールという日本でもよく知られた文豪が浮世絵版画研究に打ち込んできたことを、数度にわたり講演や執筆を通して日本の識者に伝える意思のあったことが確認できた。また 2019 年は荷風の生誕 140 年没後 60 年にあたっており、講演として「永井荷風『日和下駄』(1915 年)にみる景観―江戸から東京へ」(2019 年 9 月)と「荷風と明治の都市」(2019 年 11 月)、「永井荷風『日和下駄』の東京―重層する時空間」(2021 年 4 月)で、北斎や広重と彼らの弟子たちの作品を、荷風がどのように江戸と東京の景観を語る際に参考にし、その文章の魅力につなげたかを伝えた。さらに依頼により、文京区立森鷗外記念館特別展の図録に「『日和下駄』の都市景観」を、都市計画の専門雑誌「都市＋デザイン 38 号」に「永井荷風が描いた体感できる街空間」を発表して、浮世絵版画による都市の歴史を重層的に体感しうる街づくりにも参考になることを伝えた。一方新たな試みとして、荷風が「浮世絵の山水画と江戸名所」などで分析している広重と、荷風が再発見したといわれる明治初期の浮世絵師小林清親が描いた江戸名所の同じ風景で、荷風の小説『すみだ川』に登場する作品を約 40 点探し出し、絵画作品と文学作品がもたらす相互イメージを、間テクスト論やジェオポエティック(géopoétiqie は 1980 年代末に Kenneth White が提唱した造語で学会もある)の方法論を用いて分析し、方法論の有効性を問うために学会発表をしたうえで(2017 年 11 月)、紀要論文として「『すみだ川』の重層する風景 ： 荷風・清親・広重など」にまとめて、図版 34 点とともに発表した。

(6) ここまで主に荷風の 1908 年から 1915 年までの浮世絵版画研究について研究を行ってきた。が、荷風が既発表の論考を大幅に書き換えて単行本『江戸芸術論』にまとめたのが 1920 年であることから、単行本にするそもそもの経緯(野口米次郎の『六大浮世絵師』の影響、専門雑誌『浮世絵』での反響、第一次世界大戦中とその後の日本の社会文化状況の変化、荷風自身の境遇の変化など)を考察し、さらに本文の異同について検証し、参照されている外国人研究家の経歴と著書、その特色などをまとめて、「永井荷風『江戸藝術論』をめぐって」(2022 年6月)のタイトルで口頭発表をした。これは論文に発展させる予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 南　明日香	４．巻 84
２．論文標題 パリ装飾芸術美術館における審美書院展と桑原羊次郎コレクション展（一九一一年）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 相模女子大学紀要	６．最初と最後の頁 1－19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 南　明日香	４．巻 38
２．論文標題 永井荷風が描いた体感できる街空間	５．発行年 2020年
３．雑誌名 都市＋デザイン	６．最初と最後の頁 13-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南　明日香	４．巻 82
２．論文標題 オスカー・ミュンスターベルク旧蔵書とその目録について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 相模女子大学紀要	６．最初と最後の頁 1-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 南　明日香	４．巻 46
２．論文標題 全集未収録永井荷風「仏國文豪の浮世絵研究」について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 相模国文	６．最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Asuka MINAMI	4．巻 12
2．論文標題 La Redecouverte de l'Ukiyo-e au cours des annees 1910	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Japon pluriel 12	6．最初と最後の頁 97-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 南　明日香	4．巻 37
2．論文標題 「日本趣味」か「江戸趣味」か―日本近代文学とジャポニスム	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ジャポニスム研究	6．最初と最後の頁 46-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南　明日香	4．巻 81A
2．論文標題 『すみだ川』の重層する風景　荷風・清親・広重など	5．発行年 2018年
3．雑誌名 相模女子大学紀要人文科学編	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南　明日香	4．巻 特別
2．論文標題 日和下駄の都市景観	5．発行年 2019年
3．雑誌名 永井荷風と森鴎外	6．最初と最後の頁 30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 南　明日香
2．発表標題 「西洋近代美術史学におけるジャポニスムの位置」：「日本趣味」から「ジャポニスム」研究へ
3．学会等名 ジャポニスム学会40周年記念フォーラム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 南　明日香
2．発表標題 永井荷風『日和下駄』（1915年）にみる景観―江戸から東京へ
3．学会等名 さがまちカレッジ
4．発表年 2019年

1．発表者名 南　明日香
2．発表標題 荷風と明治の都市
3．学会等名 江戸東京博物館永井荷風生誕140年没後60年記念講座（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 南　明日香
2．発表標題 フランス装飾美術連合開催の日本美術展（1909～1914）について
3．学会等名 明治美術学会2018年度第一回例会発表
4．発表年 2018年

１．発表者名 南　明日香
２．発表標題 Nagai Kafu La Sumidaから永井荷風『すみだ川』へ
３．学会等名 日本近代文学会第3回国際研究集会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 南　明日香
２．発表標題 永井荷風『日和下駄』重層する時空間
３．学会等名 公益財団法人日本近代文学館（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 南　明日香
２．発表標題 ＜見せたい＞日本美術とは パリ装飾芸術美術館連続展覧会を中心に
３．学会等名 神奈川県立図書館生涯学習フェア（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 南　明日香
２．発表標題 永井荷風『江戸藝術論』をめぐって
３．学会等名 早稲田大学エクステンションセンター（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 南　明日香	4．発行年 2018年
2．出版社 エディション・シナプス	5．総ページ数 21
3．書名 パリ装飾芸術美術館浮世絵版画展 1909～1914年　別冊解説	

1．著者名 ジャポニスム学会編　南　明日香	4．発行年 2021年
2．出版社 思文閣出版	5．総ページ数 315
3．書名 ジャポニスムを考える　日本文化表象をめぐる他者と自己	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	Archives au musee des arts decoratifs			